



# 小田原城址 公園にて

11月25日

Sudden Fiction Project

高階經啓  
hirotakashina

## 11月25日のおはなし「小田原城址公園にて」

するすると這っていた蛇が鎌首をもたげて話しかけてきた。

いや。それは正確ではない。もうちょっと丁寧に話すとうこうことになる。昨日の朝ぼくは小田原城の敷地内にいた。天気はよく、もうそれほどでもなくなった暑気の名残と、少し音圧の低くなった蝉の音が、夏の終わりを思わせた。前夜の公演とその後の打ち上げでいささか気の抜けたぼくら4人は、地元のIさんの案内で城内をてくてくと歩いていた。

以前からさんが「将来、野外公演を打つならここ」と目をつけていた場所を見て回るためだった。銅の門と書いて「あかがねもん」という門のまわりはなるほど絵になる風景だった。門もいいが、それにいたるアプローチもいい。門の方から見下ろすと、ちょうど階段席のような感じで、観覧しやすそうだ。つきあたりの石垣と白壁がストイックに絞られた舞台背景にも見える。逆に下から見上げるような客席を組んで、門を舞台装置として見上げてても素晴らしい。左右にどっしりとして、屋根にはしゃちほこが張り出した立派な門がスケール感のある物語を予感させる。

天守閣も見ておこうというのでぶらぶらと城内を歩く。緑が多く、風も爽やか、他に人もおらず（当たり前だ、火曜日の朝なのだから）、まるでどこか観光旅行にやって来たかのような気分だ。まあ、小田原はもちろん実際に観光地でもあるのだろうけれども。城内に動物園のあるお城というのはよくあることなのか、珍しいことなのかかわからないが、思わず頬がゆるむ。象のウメ子に挨拶をし、リスザルなど冷やかしていると、象舎前に留まっていた3人が声を上げる。

近づくと蛇が身をうねらせながら、するすると進んでいるところだった。長さは1メートル2、30センチといったところだろうか。離れたところでは年輩の女性が声を張り上げて騒ぎ出す。動物園の係員が、特に慌てるでもなくすたすたと近づいてきて蛇に追いついたかと思うと、やおら首の後ろを踏みつけ、動きがとまったところでしっぽをつかみ、ぶらぶらと振り回しながら遠ざかっていった。そういうことはしょっちゅうやり慣れている、とでもいうような鮮やかな手並みだった。

その時である。不意にぼくは世界がぐらぐらと揺れるのを感じた。同時に、いってえなあ畜生。こいつ俺の首の骨を折るつもりだったな。けっ。そうは問屋がおろさねえ。そう簡単におっ死んでたまるかってんだべらぼうめ、という考えが頭に浮かんだ。揺れているのは世界ではなく視界だった。そう。ぼくはいままさにしっぽをつかまれぶらぶら振り回されている蛇の視界と考えに同調し体験していたのだ。

そう気づいた瞬間、蛇はすっと首をもたげ、ぼくの方を見た。同時にぼくは視線の先にぼく自身を見据えることになる。なんだ、おめえは、俺の考えを読んでいるのか、え、おい？ じゃあ何とかしろよ、これを。このままじゃ俺あこのダンナに蒲焼きにされちまわあ。頭の中に蛇の考えが、まるでぼく自身の考えのように浮かんでは消える。蛇もまたぼくと同調しているのだ。

ぼくは後の3人に気づかれないように、唐突に聞こえないようにしながら、「それではぼくはそろそろ引き上げます」と告げる。駅の途中まで案内するというIさんに「もう、ここでわかりますから大丈夫です」と言って早々に別れ、しばらくその場で携帯電話をかける振りをして過ごし、それからそっと小田原城の敷地内に引き返す。

蛇の視界がずっと残っていたので居場所はすぐにわかった。

関係者以外立入禁止と書かれた仕切りを押すと鍵はかかっておらず、ぼくはごちゃごちゃと小さなプレハブの並ぶ一画に潜り込む。飼料倉庫になっている建物に入ったすぐのところに蛇はいた。蛇は特に蒲焼きにされることもなく、狭いケージに放り込まれていた。野生の蛇なのでこのまま動物園で飼うわけではなく、さりとて動物園で殺すわけにもいかないの、おそらく夜

になったら離すのだろう。ぼくはケージの前にしゃがみこんだ。

不意に自分の顔がアップになって見えるので思わずよろける。ぼくの目に見えるぼくもしゃがんだ姿勢で後ろに転びそうになる。なんだこの野郎、いつまで待たせやがんだコンコンチキめ。とっとと、ここから出しやがれコン畜生。ぼくはケージの扉をいじったがここには鍵がかかっていた。しょうがない、鍵を見つけに行こう。そう思って立ち上がったとき蛇が言った。もっと簡単な方法があるぜ。ほら。

視界の中のぼくはゆっくり振り向くと近づいてきてケージの前にもう一度しゃがみ、はっきり声に出してこう言った。

「どうだい。これで俺は外に出た。え？ 何か文句あるかい、このすつとこどっこい。一発逆転ホームランってわけだ。驚いたかこの抜け作が」

そしてぼくは、ぼくの姿をしたあれは飼料倉庫を出ていった。ぼくはケージから出ようともがいたが、ぼくには手も足もなくなっていた。暴れたくてもぬらぬらぬらぬらからだがうねるだけだ。冗談じゃない。一発逆転だって？ ふざけたことを。まだ負けたわけじゃない。延長戦に持ち込んでやる。そして今度は、今度こそ、このぼくがおまえを蒲焼きにして食べてやる。

(「延長戦」 ordered by エルスケン-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 小田原城址公園にて[SFP0148]

<http://p.booklog.jp/book/39525>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39525>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39525>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.